



Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol. **36**
2014

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

- CONTENTS ■ チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
■ 長崎市立小ヶ倉中学校で出前講座を開催しました。
■ 核兵器廃絶・平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■ 第10回永井隆平和記念・長崎賞の受賞者が決定しました。



長崎大学本学中庭にて

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施



長崎県濱本副知事を訪問

チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報提供を行うため、今年度も6名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は7月16日から約1ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門機関において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や長崎原爆死没者追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについて理解を深めました。

【日程概要】

- 7/16 長崎到着
- 7/17～8/4 関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
- 8/5～8/18 長崎大学（病院）等での専門研修
- 8/19 帰国のため長崎出発

[研修生名簿] ※右から

1. トマーノフ コンスタンチン (ロシア) オブニンスク放射線医学研究所 上級研究者
2. イワノーワ マリア (ロシア) 北西国立医科大学 助手
3. シュペルケービチ アーラ (ベラルーシ) ベラルーシ医科大学 准教授
4. ウサーヴァ ナターリア (ベラルーシ) ゴメリ医科大学 助手
5. サヤケーノフ ヌラン (カザフスタン) セメイ医科大学 准教授
6. アウケーノフ ヌラン (カザフスタン) セメイ医科大学 主任



長崎市田上市長を訪問

研修後の感想



Tumanov Konstantin (トマーノフ コンスタンチン)

ロシア連邦保健省付属国立オブニンスク放射線医学研究所 上級研究員

放射線健康リスクに関する研修は、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 (NASHIM) の主催で2014年7月17日から8月18日まで行われた。

長崎市は1945年に原子爆弾による爆撃を受けた。その後長崎ではすでに約70年間、放射線が健康に及ぼす影響の研究および被ばくした人々 (ヒバクシャ) とその子孫に関する医療情報の収集が行われている。NASHIMの活動の主な目的の一つに、原爆犠牲者の医療の専門家あるいはチェルノブイリ原発事故やセミパラチンスクの核実験の影響の研究のための教育がある。

2014年7月～8月にNASHIMが実施した研修は、主に長崎大学原爆後障害医療研究所と長崎大学医学

部を拠点として行われた。

その他に、ロシア連邦、ベラルーシ共和国、カザフスタン共和国から2名ずつの研修員グループは、赤十字病院、長崎原子爆弾被爆者対策協議会、放射線影響研究所、原爆ホーム、国立病院機構長崎医療センターを訪問した。また、NASHIMは長崎県医師会（時本会長）、長崎県庁（濱本副知事）、長崎市役所（田上市長）への表敬訪問もアレンジした。研修員グループは原爆資料館と追悼平和祈念館を訪れ、8月9日には平和祈念式典に参列した。

7月17日から8月4日までは原爆後障害医療研究所において、長崎大学の優れた教授陣（山下教授、高村先生、鈴木先生、三根先生、中島先生、工藤先生、V・サエンコ先生、李先生と福島大学の柴田教授）によって放射線生物学、放射線疫学、放射線診断学、核医療、血液学などの分野の重要なテーマについて14の講義が行われた。

8月5日から18日の間は、原爆後障害医療研究所と長崎大学医学部において各研修員がそれぞれの専門別の研修を受けた。

カザフスタン共和国から来たN・アウケノフ氏と私は、原爆後障害医療研究所の健康リスク管理学研究分野において研修を受けた。

V・サエンコ教授の指導のもと、私は甲状腺がんの罹患率の研究のためのデータの作成と分析を行った。放射線影響の分子生物学および集団放射線疫学（環境疫学的分析）という2つの分野の研究のためのデータに関する作業を行った。

研修は最高のレベルで実施されたと言える。実践的な研修と専門的医療機関の見学では多くの新しい情報を得ることができ、日本のヒバクシャ医療および放射線影響と健康リスクの研究における先進的な経験を知ることができた。また、日本側は、研修員の滞在費、食費、交通費も負担してくれた。研修員の受け入れ担当の西さんと通訳の熊見さんの最高にプロフェッショナルな仕事は特筆に値する。また、研修員は快適なホテルに滞在し、研修だけではなく、観光名所が多く美しい長崎市で十分な余暇を過ごすためのあらゆる可能性を提供されたということも指摘したい。

非常に盛りだくさんの日程ではあったが、もし長崎大学、福島大学の教授陣の非常に多忙な研究・実践活動を考慮した上で可能であれば、原爆後障害医療研究所における講義の数を次回以降30%ほど増やしてもよいのではないかと。研修員は、権威ある日本の学者の講義をあと4～5回喜んで聞かしてもらいたい。

また、専門分野の知識を得るのに最も適切と思われる英語文献のリストを、各教授が講義資料の中に加えてくれれば、研修員にとって極めて有益だと思う。



恵の丘長崎原爆ホームにて



Ivanova Mariia (イワノーワ マリア)

ロシア連邦 北西国立医科大学 放射線衛生学 精神科 助手

研修は、放射線が人間の健康に及ぼす影響というテーマで行われた。研修は7月17日から8月18日までの期間に実施され、理論的な部分と実践的な部分から構成されていた。理論的な部分では、被爆者対策協議会、赤十字病院、放射線影響研究所など多数の大規模な専門機関を訪問し、14の講義を聴講した。私にとって特に興味深かったのは、山下教授と高村教授の福島原発事故後の放射能汚染の問題に関する講義、柴田教授の疫学の講義、鈴木教授の放射線生物学の基礎に関する講義、李教授の幹細胞に関する講義だった。少量被ばくが人体に及ぼす影響はサンクト・ペテルブルグの学者らにとっても重要な問題である。原爆ホームや原爆資料館の訪問で、原爆の犠牲者に対する日本人の深い配慮が分かった。日本国民が犠牲者の声を全世界に届けるために全力を尽くしていることに感動した。8月9日の式典への参列は私にとって大変な名誉だった。

研修日程の中で、長崎県や長崎市、また長崎大学のトップの方々への表敬訪問が実施され、このような権威ある尊敬すべき人々からの厚遇に感激した。

研修の実践的な部分では、長崎大学病院の精神神経科で小澤教授の指導を受けた。その中で、精神科の仕事のしかた、医療関係の書類作成の原則、精神疾患患者の治療に対するアプローチに関する知識を得、小澤教授の病棟回診や外来患者の診察に参加した。心を開いて接して下さった小澤教授、鬼塚医師、楠本心理士、小林研修医に感謝したい。

受け入れ担当の西さん、通訳の熊見さんのプロフェッショナルな仕事のおかげで、研修は参加者にとって最大限に快適なものとなった。原爆後障害医療研究所の優れた専門家の皆さんとの交流を促進してくれたウラジーミル・サエンコ先生に特にお礼を申し上げたい。



Shepelkevich Alla (シュペルケービチ アーラ)

ベラルーシ医科大学 内分泌学、糖尿病 准教授

研修の時期は、原爆犠牲者の追悼に関わる重要な行事を完全に体験できる時期に計画されていた。それによって、悲劇の規模と、ヒバクシャを支援してきた人々の膨大な仕事を完全に理解することができた。最適の時期だと思う。

表敬訪問によって、核兵器のない世界を目指すという共通の人道的な思想によって結ばれた大変興味深い人々と交流することができた。そのクライマックスとなったのが平和祈念式典への参列であり、犠牲者の追悼に対する長崎市および全国の人々の思いを多面的に感じることができた。

研修の理念および実施の水準は素晴らしかった！

学術的な部分については、講義の内容と、熱心に説明し、質問に詳細に答えてくれた講師のレベルの高さを指摘したい。私や他の研修員が事前に希望したテーマもプログラムに加えられたことを知って嬉しかった。そのおかげで放射線医学だけではなく、関連分野の知識のレベルも高めることができた。私にとって大変興味深かったのは、放射線診断、遺伝、放射線生物学、そしてもちろん内分泌の専門家との交流だった。

大学病院での研修およびその他の臨床施設の訪問によって、長崎市、そしておそらく日本全体の医療の水準を評価することができた。とても貴重な体験だった！高い専門能力および患者へのとても思いやりのある態度は、日本の医師に対する深い尊敬の念を抱かせるものであった。

最後に、自由時間の観光についてNASHIM担当者および通訳の感動的な配慮があったことを指摘しないわけにはいかない。

暖かい人々が住み、史跡や現代の名所を大切にする長崎のすばらしい街は永遠に私の心の中に残るだろう。



Usava Natallia (ウサーヴァ ナターリア)

ベラルーシ ゴメリ医科大学 神経学、脳神経外科 助手

まず最初に、蒔本会長を初めとするNASHIM、研修指導者の山下教授に対し、長崎市での研修に参加する機会を与えていただいたことに心から感謝したい。

研修プログラムは非常によく考えられ合理的かつ便利に組み立てられており、未知の国に最大限快適に適応できるような構成と順序になっていた。

最初の週はNASHIM、県庁、市役所、大学その他の組織のトップへの公式訪問があった。私にとっては大変名誉なことであり興味深かった。

もっとも心を動かされたのは、原爆資料館の見学と原爆ホームでのヒバクシャとの交流だった。原爆の悲劇を直接体験した人の話によって、1945年8月の出来事の恐ろしさを深く感じる事ができた。私が思うに、研修のこの部分は、人類共通の価値感、道徳、人道主義に関わるものとして非常に重要である。その意味で平和祈念式典への参列は私にとって特別の感動的な行事だった。

プログラムの枠内で様々な側面からの放射線安全に関する講義を聴講した。講義は学術的にも教授法的にも高いレベルで構成されており、資料は理解しやすい形で作成されていた。特に興味深かったのは、山下教授と高村教授の福島原発の事故処理に関する講義だった。チェルノブイリ地域の住民である私にとって身近な問題だからである。柴田教授の講義では疫学および生物統計学の問題が深く詳細に説明されていた。ウラジーミル・サエンコ先生の甲状腺がんの講義はレベルの高い先進的な内容で、教育的な観点から見て私にとってとても有益だった。核医学、細胞移植、血液学の講義は、学術的な視野を広げ、これらの技術の先進的な可能性を示すものだった。

研修の臨床部分は、専門家としての我々にとって非常に有益だった。私は、日本での神経および神経外科疾患の診断および治療の特徴を学んだ。日本の同僚たちと共に多くの専門的な問題を話し合うことができた。私の個人的な関心や希望を考慮してくれた研修主催者に感謝したい。脳卒中患者の治療方法に関して貴重な臨床経験を得ることができたので、多くの点で自国での仕事に生かすことができると思う。

父親のような思いやりと心遣いで研修員に接してくれた山下教授との交流は特に心に残った。

受け入れ担当の西さんと通訳の直子さんに心から感謝したい。西さんはすばらしいオーガナイザーとして公式行事をうまくこなす手助けをしてくれただけでなく余暇にも配慮してくれた。彼らとの交流は気持ちよく快適なものだった。直子さんの非常に高い通訳能力と人柄の良さを指摘したい。また、多国籍チームである研修員の人選が素晴らしかったことも指摘する必要がある。お互いすぐに親しくなれ、そのことも長崎滞在の良い印象を付け加えるものとなった。

滞在条件の良さも指摘したい。ホテルには快適な生活のために必要なものがすべて揃っており、特に高品質のWi-Fi、市の中心という便利なロケーションがよかった。

最後に、この研修は、学術、教育、専門性、人道主義、感情といったすべての重要な側面において、私にとって大変有益だったと申し上げたい。よく考えられたロジスティクスを含め研修の準備と実施に関わったすべての人の高いプロフェッショナリズムを強調したい。全体として素晴らしい印象が残った。今回の研修に参加する機会を与えて頂いたことにもう一度深い感謝を表したい。



長崎原爆死没者追悼平和祈念館にて



Aukenov Nurlan (アウケーノフ ヌルラン)

カザフスタン共和国 セメイ医科大学 分子生物学 主任

NASHIMの研修プログラムには、公式行事、医学の主な最新分野に関する講義および研究室での実習が含まれていた。私はここに非公式な部分（研修員の余暇）も付け加えてよいと思う。研修は全体として非常に高いレベルで実施された。各部分について詳しく述べたい。

公式行事としては、長崎の県庁、市役所、県医師会のトップに招かれた。どこでも非常に暖かく迎えられ、私たちが関心のある問題について意見を交わした。原爆資料館と原爆ホームの訪問、広島と長崎の原爆を体験した人々の話は深く心に残った。まるで私たち自身が悲劇の現場にいたかのような感覚だった。平和祈念式典への参列はこれらの行事の締めくくりとなった。大村の医療センターの見学は興味深く、院長が県の医療について説明してくれた。

講義には医学の最も先進的な分野が含まれていた。山下教授、高村教授、柴田教授、サエンコ教授、李教授の講義が非常に興味深かった。セミパラチンスク国立医科大学にはセミパラチンスク核実験場周辺の

汚染地域に住んでいる住民のリハビリに関する科学技術プログラムがあるので、講義で得た知識をこのプロジェクトに生かすつもりである。

山下教授、ウラジーミル・サエンコ先生、タチヤナ・ログノーフ先生には、分子遺伝学の新しい方法を修得する手助けをして頂き、とても感謝している。これによって新しい共同研究プロジェクトをスタートすることができるだろう。

研修はとても高いレベルでオーガナイズされており、公式行事の部分だけでなく、自由時間も研修員が日本滞在を楽しめるように配慮されていた。私にとっては、日本人の日常生活や伝統、文化を知ることがとても重要だった。これに関しても受け入れ担当の西さんと通訳の熊見直子さんがとても助けになってくれた。滞在したホテルはとてもすばらしかった。最初は部屋の狭さに驚いたが、すぐに慣れて長崎滞在を楽しめるようになった。長崎市の観光名所のほとんどすべてに徒歩で行けるホテルの位置がとても気に入った。

最後に、研修が専門分野に関するものだけでなく、文化、教養という意味でもとても多くの有益な情報をもたらしたということを申し上げたい。



Sayakenov Nurlan (サヤケーノフ ヌルラン)

カザフスタン共和国 セメイ医科大学 法医学 准教授

NASHIMが計画した研修は、大変合理的に実施された。講義および実習が行われた機関は便利なロケーションにあった。講師の先生方の親切と高い職業意識を特に指摘したい。

一週目と二週目は、NASHIM、長崎県、長崎市、長崎大学、医療センター、赤十字病院など数多くの訪問があり、それぞれ内容が豊富で興味が持てた。

長崎原爆資料館の見学と原爆ホームで直接の体験者から聞いた1945年8月の悲劇の話には非常に大きく深い感銘を受けた。道徳と人道主義に関わる非常に重要な問題だと思う。平和公園での式典参列は私にとって特別な経験だった。

用意された日程通り、放射線安全および福島原発の事故処理について山下教授、高村教授、柴田教授の講義を受けた。中島教授、サエンコ教授その他の先生方から疫学、生物統計学、悪性腫瘍の病理形態学についての講義を受けた。核医学、細胞移植、血液学についての講義は私の学問的視野を広げてくれ、これらの技術の可能性を知ることができた。すべての講義が学問的、教授法的に高いレベルで構成されており、資料は理解しやすい形にまとめられていた。セミパラチンスクの住人である私にとってこれらの問題は身近であるため、すべて興味深かった。

研修の実践的部分は大変有益だった。長崎大学の病理学科および法医学科を紹介してもらった。研修は大変充実したものだった。病理学科では病理解剖医の仕事のしかた、臓器や組織の免疫組織化学染色の方法を学んだ。これについては中島教授、七条助教、松山助教、大学院生のジャンナ・ムサジャノワさんが熱心に助けてくれた。彼らが実り多い仕事のために整えてくれたチームワーク、忍耐、配慮、居心地の良さに特に感謝したい。法医の仕事、書類作成、電子法医学鑑定書の作成について講義し、死亡学、組織学、

化学、犯罪医学の専門家の仕事を実際に見せてくれた法医学講座の主任である池松教授に特別な感謝の言葉を述べたい。ガラスプレパレートの見方、Leicaのビデオ装置“Aperio Scan Scope AT Turbo”を使っての生物標本の撮影のしかたも教えてもらった。日本の同僚たちと、両大学の協力、私の勤務する大学の病理学講座が持っている「麻薬中毒死亡者の内臓の免疫形態学的変化」というテーマのグラントに関して意見交換をした。私の個人的な関心や希望を考慮してくれた研修主催者に感謝したい。研修で得た貴重な臨床経験をカザフスタンで利用するつもりである。

公式日程だけでなく余暇にも配慮してくれた受け入れ担当者の西さん、プロとしての高いレベルと人柄の良さに対して通訳の直子さんにも大変感謝している。

今回の研修は私にとって学術、教育、人道、感情のすべての面でとても有益だった。研修日程の準備と実施に関わったすべての人の仕事ぶりが高いレベルにあることを強調したい。最後にもう一度、今回の研修に参加するチャンスを与えて頂いたことに深い感謝の気持ちを表したい。



平和祈念式典にて

長崎市立小ヶ倉中学校で出前講座を開催しました。

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う「出前講座」を実施しています。平和と科学、医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

6月16日には長崎市立小ヶ倉中学校で第1回の出前講座を開催しました。3年生の生徒さん81名を対象として、長崎大学の三根真理子教授が、「長崎原爆被爆者のこころの調査」と題して、アニメーションも交えわかりやすく講義を行いました。

右記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明いたしますので、興味をお持ちの方はぜひ事務局までご連絡ください。



講座メニュー

放射線って何？－身近な放射線の話

放射線・紫外線とわたしたちの健康

長崎原爆の話

原爆直後の救護活動と調査

長崎原爆被爆者のこころの調査

放射線といのち



核兵器廃絶・平和建設国民会議が活動助成金を寄附



今年も核兵器廃絶・平和建設国民会議 (KAKKIN) に寄せられた浄財を活動助成金として、NASHIMに寄付をいただきました。KAKKINは1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者保護、平和建設のために積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年に渡りカンパ活動を実施され、多く

の医療施設等へ検診車、車椅子、ベッド、医療機器等を寄付されています。NASHIMへも毎年、活動助成金を寄付していただいております。頂いた助成金は海外からのヒバクシャ医療研修生受入事業等に活用しています。

贈呈式は8月8日に長崎原爆資料館で行われ、NASHIMからは白倉書記が蒔本会長の代理として出席して、社会福祉法人恵の丘原爆ホーム等の10団体と共に贈呈を受けました。KAKKINのこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。

NASHIMといたしましても、この活動助成金を有効に活用し、世界のヒバクシャ支援に努めてまいります。

第10回永井隆平和記念・長崎賞の受賞者が決定しました。



丹羽 太貫 氏

NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年に、原子爆弾により重症を負いながらも被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しました。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰するもので、今年度は第10回目となります。

5月から9月1日まで候補者を公募したところ、4件の推薦がありました。この中から本年は福島県立医科大特命教授で京大名誉教授の丹羽太貫氏が受賞者に決定しました。授賞式は2月6日に予定されています。